

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 10 月 26 日現在

機関番号：28002

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463580

研究課題名(和文)高齢者の地域文化行動による介護予防への貢献

研究課題名(英文)Preventive elderly nursing care and regional cultural behavior

研究代表者

佐久川 政吉(sakugawa, masayoshi)

沖縄県立看護大学・その他の研究科・准教授

研究者番号：80326503

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：沖縄県出身ボリビア移民1世高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響を明らかにし、今後の介護予防や介護を支える地域ケアについて検討した。研究協力者は102名(81.6%)であった。その結果、今の暮らしへの「満足群」が8割を越え、沖縄県をルーツとすることに誇りに持ち、地域文化行動(方言や伝統行事等)を継承していた。それが、人生の最期の過ごす場として、移住地(コロニア・オキナワ)で暮らしの継続(9割)や、次世代への地域文化行動の継承への必要性等、幸福感に影響していることが示唆された。今後は、介護が必要になっても、彼らが切望する移住地での暮らしが続けられるための地域ケアへの支援が必要である。

研究成果の概要(英文)：To establish preventive nursing care and a community support system for such care, we investigated how regional cultural behavior affects sense of well-being among elderly members of the first generation of Okinawan immigrants to Bolivia. A survey of 102 (81.6%) first-generation Okinawan immigrants revealed that >80% of them were satisfied with their present lifestyle, were proud of their Okinawan roots, and carried on Okinawan culture, such as traditional events and use of regional dialect. Such attitudes apparently affected the first-generation immigrants' decision to spend the last years of their lives in Colonia Okinawa (>90% of them) and to pass regional cultural traditions down to the next generation of Okinawan immigrants, thus influencing overall sense of well-being. It is necessary to establish a community support system that provides nursing care to Okinawan immigrants for future use, to help them as they continue living in their beloved adopted home.

研究分野：老年看護学

キーワード：高齢者 移民 地域文化 幸福感 介護予防

## 1. 研究開始当初の背景

高齢者は生きてきた歴史の中で、それぞれの文化に影響を受ける。高齢者のもつ文化を受け入れたか否かによって、老いの感じ方は異なる。また、老いの表現や高齢者の地位、若年者から受ける対応は文化的背景によって特有の意味をもつと思われる。

このような背景から、高齢者ケアにおいても文化に着目した研究がみられる。正木・山本(2008)は、「文化的視点は高齢者の健康を包括的に捉える上で有用であること、文化的視点をケアに生かしていくためには、高齢者の日常生活行為そのものに反映されている日本文化や地域文化を洞察すること」を提案している。また、正木・張ら(2009)は、「日中の認知症予防教室の開発過程を比較し、両国の文化的背景における共通点・相違点を明らかにし、自国の文化に根ざした実践を形づくること有意義であること」を示唆している。下地(2007)は地域文化行動が高齢者の幸福感に多様な影響を及ぼすことや、故郷を離れて生活している高齢者であっても、地域文化行動を維持し幸福感をもって暮らしていることを明らかにした。これらの知見は、高齢者ケアにおいて地域文化を取り入れることの必要性を示している。

ところで、介護予防において、地域文化は取り入れられているのだろうか。超高齢社会で介護予防の重要性が高まっているが、活動の実態として、従来の専門職主導の機能訓練など、画一的な活動が多くみられる。一方で、住民のニーズに基づいた活動(斉藤ら:2008)や、住民と専門職との協働による活動の評価(大越ら:2005)がみられる。これらは、当事者の立場に立った活動の重要性を示唆しており、住民主体やニーズと同じように、高齢者の地域文化行動にもつながっていくと思われる。したがって、健康長寿や生きがいづくりの推進、閉じこもりや孤独死の予防など超高齢社会の課題解決のための介護予防

は、専門職主導による活動だけでなく、当事者(高齢者)の強みである地域文化行動を取り入れて活動を活性化していく必要がある。

地域文化行動を取り入れた介護予防を明らかにするためには、地域文化行動が色濃く残っている高齢者の集団を選定する必要がある。そこで我々は、戦後に移民として故郷(沖縄県)を離れ、異国の地(現在のポリビア多民族国サントクルス州コロニア・オキナワ、以下、移住地と略)で生活しながら、自らの文化へのアイデンティティを基盤に行動していること(限定された移住地に住み続けていること、沖縄の生活様式や方言、伝統行事などを継承しながらポリビアの人々と共存してきたこと、特に移民1世は文化へのアイデンティティを強くもち、老年期を迎えていることが予測されること)から、沖縄県出身ポリビア移民1世高齢者に着目した。

以上のことから、先行研究を応用し、沖縄県出身ポリビア移民高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響を明らかにし、介護予防に貢献するための実践的な手がかりを得ることには意義がある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、沖縄県出身ポリビア移民1世高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響を明らかにし、今後の介護予防の方向性を見出すことである。

## 3. 研究の方法

1) 調査の進め方: 研究計画1年目(平成25年度)の予備調査を経て、2年目(平成26年度)に移住地において調査を実施した。3年目(平成27年度)に分析および報告の準備を行った。

2) 研究協力者: 移住地に在住する65歳以上の沖縄県ポリビア移民1世の全高齢者(以下、1世高齢者と略)で、調査困難な者(認知症等)を除く高齢者125名とした。

3) データ収集: 研究協力者に対して、半構

造化された調査票を用いて、以下の調査項目に添って、個別面接聴き取り調査を行った。調査の際、研究協力者の許可を得て、ICレコーダーに録音した。調査の有効回答は102票(81.6%)であった。

(1)調査項目：基本属性(性別、年齢、家族構成、沖縄県の出生地、移住年、職業歴)、移住地への愛着(移住地以外の居住経験、居住年数、生活満足度)、健康と自立度(主観的健康観、受診状況、主疾患名、日常生活の自立度、社会参加の状況)、人的ネットワーク(知人の範囲、用件依頼の授受、隣人への支援意識、故郷沖縄への支援)、地域活動への参加(楽しみ、地域活動への参加、地域活動での役割、地域活動と健康感・幸福感との関係)、介護を受けたい場、人生の最期を過ごしたい場(介護の場の選択、人生最期の場)、アイデンティティ(沖縄の文化での誇り、移住地での心の支え等)、幸福感(幸福感尺度)

#### 4) データ分析：

(1) 1世高齢者の概要を把握するため、調査項目について単純集計を行った(研究成果1)。

(2) 1世高齢者の地域文化行動への参加と主観的幸福感・日常生活自立度および生活満足感との関連を検証した(研究成果2)。沖縄の伝統行事や地域行事などについて地域文化行動への参加の有無を問う13項目は、尺度としての信頼性があるとみとめられ(クロンバックの $\alpha = .776$ )、尺度化を行った。地域文化行動への参加尺度得点は、参加活動数により「低得点(0~4)」、「中得点(5~7)」、「高得点(8~13)」の3段階とした。主観的幸福感は、既存の小田(2004)の主観的幸福感尺度(36項目、3件法)を援用し、108点満点の合計得点を主観的幸福感尺度得点として算出した。また、36項目のうち、いずれの因子に対しても因子負荷

量が高い項目、あるいは因子負荷量が0.5未満の低い項目を除いた9項目について、主因子法(バリマックス回転)により、3因子(回顧的達成感因子、老いの認識因子、対人的生活行動因子)を抽出した(累積寄与率52.8%)。日常生活自立度は、パーセルインデックス得点で算出し(クロンバックの $\alpha = .94$ )、「低得点(0~27)」、「中得点(28~29)」、「高得点(30)」の3段階とした。生活満足感は、5件法で尋ねた。上記の地域文化行動への参加尺度、主観的幸福感尺度得点およびそれを構成する3因子、日常生活自立度尺度および生活満足感との関係を、二変数関連分析などにより検討した。

5) 倫理的配慮：調査趣旨の説明と合意、個人情報保持などへの配慮として、所属機関および研究協力者の理解・承認を得て実施した。

#### 4. 研究成果

##### 1) 1世高齢者の概要

今の暮らしについて「のんびりできる」などの理由で、「満足」80.4%、「やや満足」9.8%、「普通」9.8%であった。

主観的健康状態は、「非常に健康」18.6%、「どちらかといえば健康」48.0%、「どちらかといえば健康でない」23.5%、「健康でない」9.8%であった。

相互扶助は、「相互依存・相互支援」43.1%、「支援」11.8%、「依存」23.5%、「非依存・非支援」21.6%であった。

故郷沖縄への支援は、61.8%が電話をかけ近況を確認するなどの支援を行っていた。

地域活動への参加は、「高得点」31.4%、「中得点」37.3%、「低得点」31.4%であった。

役割として、「お盆」38.2%、「運動会」25.5%、「敬老会」21.6%、「豊年祭」18.6%などであった。

入植以来、故郷沖縄県の地域文化を誇りに持ち、方言や伝統行事(豊年祭など)を守り抜いていた。日頃はゲートボールなどに参加

し、健康・生きがいを仲間同士で楽しんでいた。

人生の最期をどこでどのように過ごしたいかについては、「自分たちで開拓し50年以上も住み慣れた村だから」「方言が通じて安心できるから」などを理由に、「移住地での介護」を92.2%が切望していた。

心の支えになっていることとして、「移住地でも生活や行事は沖縄のままであり続けていること」の喜びや、「体を粉にして働き、苦勞したからこそ今が幸せに思えることが生きていく上での支えになっている」などを語っていた。次世代への役割としては、方言や伝統行事、ユイマールを継承する必要性を語っていた。

## 2) 1世高齢者の地域文化行動への参加と主観的幸福感・日常生活自立度および生活満足感との関連

(1) 地域文化行動への参加尺度と主観的幸福感尺度得点との関係は、ゆるい相関関係が示唆された(スピアマン  $r=.196$ 、 $p=.051$ )。

(2) 地域文化行動への参加尺度と日常生活自立度尺度との関係は、相関関係がみられた(スピアマンの  $r=.405$ 、 $p<.001$ )。

(3) 日常生活自立度尺度と主観的幸福感を構成する3因子のうち、対人的生活行動因子との間に、相関関係がみられた(スピアマン  $r=.235$ 、 $p<.05$ )。

(4) 生活満足感と主観的幸福感を構成する3因子のうち、回顧的達成感因子との間には有意な関連(クラマーの  $V=.289$ 、 $p<.01$ )や相関関係があった(スピアマンの  $r=.368$ 、 $p<.001$ )。

以上の研究成果を踏まえて考察および今後の課題を述べる。

多様な地域文化行動への参加と主観的幸福感尺度得点とは正の関連がみられたが、我々の先行研究(下地・野口ら:2007)においても、同様のことが示唆されている。また、主観的幸福感を構成する因子のうち、他者との会話やつきあいといった「対人的生活行動

因子」の因子得点が高いものは、日常生活自立度が保持されている傾向にある。さらに1世高齢者は、自分の過去を振り返り、満足感を得ることも示された。これらから、1世高齢者における地域文化を考慮した介護予防の推進の方向性として、多様な地域文化行動への参加、他者との会話やつきあい、あるいは過去の出来事などを振り返り、達成感を覚える機会などへの支援が、主観的幸福感や生活満足感を高め、日常生活自立度を保持する上で有効であることが示唆された。つまり、1世高齢者の地域文化行動は幸福感に影響を及ぼしており、それを手がかりとして、移住地における介護予防を推進していくことが必要である。

しかし、移住地での医療や介護の整備状況は十分でなく、1世高齢者は専門の医療や介護サービス(在宅・施設)への不安がみられ、入植60年以上が経過し高齢化し認知症や寝たきり等に伴う介護問題が深刻になってきている。一方で、移住地の強みとして、1世高齢者が歳月をかけてつくりあげてきた住民同士の支え合いの基盤がある。その強みを活かし、ICTを導入し、当事者である1世高齢者を含めた住民主体の介護予防を推進していくために、移住地と沖縄県の専門職や関係者が知恵を出し合い、協働で取り組んでいくことが今後の課題である。

### <引用文献>

- 正木 治恵、山本 信子：高齢者の健康を捉える文化的視点に関する文献検討、老年看護学、13巻1号、2008、95-104
- 正木 治恵、張 平平他：文化に根ざした認知症予防教室の開発過程における日中比較、文化看護学会誌、1巻1号、2009、22-30
- 下地敏洋：高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響に関する研究 - 宮古島出身者の地域文化行動を通して -、平成18年度沖縄県立看護大学大学院博士論文、2007
- 斉藤 旭代、水沼 久実他：新興住宅地域の後期高齢女性が住民主体による介護予防に参加することの意味、東北大学医学部保健学科紀要、2008、17巻2号、117-126

大越 扶貴、星野 純子他：介護予防に  
関する住民ニーズ、日本在宅ケア学会誌、  
2005、9巻2号、31-37

## 5．主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

佐久川政吉他：沖縄県出身ポリビア移民1  
世高齢者の地域文化行動と介護予防との  
関連性、日本ルーラルナーシング学会第11  
回学術集会、平成28年9月3日、山梨大  
学医学部キャンパス(山梨県中央市)。予  
定

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

佐久川 政吉 (SAKUGAWA Masayoshi )  
名桜大学人間健康学部・教授  
研究者番号：80326503

### (2)研究分担者

野口 美和子 (NOGUCHI Miwako )  
沖縄県立看護大学・名誉教授  
研究者番号：10070682

大湾 明美 (OHWAN Akemi )  
沖縄県立看護大学・大学院保健看護学研究  
科・教授  
研究者番号：80185404

田場 由紀 (TABA Yuki )  
沖縄県立看護大学・大学院保健看護学研究  
科・准教授  
研究者番号：30549027

大川 嶺子 (OKAWA Mineko )  
沖縄県立看護大学・大学院保健看護学研究  
科・准教授  
研究者番号：50162558

山口 初代 (YAMAGUCHI Hatsuyo )  
沖縄県立看護大学・看護学部看護学科・助  
教  
研究者番号：70647007